

補聴器の現状

加齢性難聴に対する補聴器の現状を見てみましょう。日本の補聴器出荷台数は年間約59万台（2021年）で、

年々増加傾向にあります。

高齢化の進展に伴い、加齢による難聴が急増しています。認知症との関連も社会的に注目されています。難聴があると認知症のリスクは高くなるようですが、補聴器による認知症の予防効果は証明されず、補聴器は認知機能に対しては部分的な効果にとどまると考えられています。

ただし人口当たりの出荷台数は、アメリカ、ドイツ、フランスが日本の約2倍、イギリスが約4倍で、日本の補聴器の普及率は低いようです（日本補聴器工業会による）。

近年は補聴器の機能が向上しています。しかし、せっかく高価な補聴器を購入したのに、装着が続かない人がいます。その原因には、

機器から聞こえる大きな雑音があります。

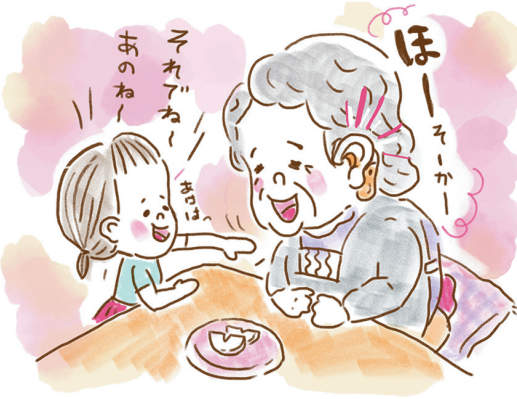
メーカーは、補聴器

の雑音抑制機能を充実させています。雑音を抑える仕組みには▽補聴器が音の周波数を監視し、エアコンの音など周波数の変化しない音を雑音と認識して増

幅せず、変化する音をさして低減させる（指向性機能）ーなどがあります。

聴覚リハビリテーションとして聞き取るための「聴覚リハビリテーション」を行うことも必要です。補聴器からの音は、それまで聞いてきた音と音質が異なるため、補聴器からの聞こえを脳に慣れさせることも必要で、装着開始時は音を下げすぎないことも大切とされています。

補聴器



最近の高機能の補聴器では、音量調節やプログラムの変更などがスマートフォンでできるものや、高度な人工知能などが使われるものもあります。しかし、補聴器が進歩したからといって、雑音が気にならず、必要な言葉がクリアに聞こえるようになるとは限りません。高齢の難聴者は、補聴器を安定して装着し、会話を

有効に聞き取るための「聴覚リハビリテーション」を行うことも必要です。補聴器からの音は、それまで聞いてきた音と音質が異なるため、補聴器からの聞こえを脳に慣れさせることも必要で、装着開始時は音を下げすぎないことも大切とされています。

機器は進歩 ただし訓練も必要

自分に合った機能の補聴器を購入するために、家族とよく相談して選ぶことも大切です。

大塚 明弘

耳鼻いんこう科部長

専門は耳鼻咽喉科